The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学初年次の少人数セミナー型科目におけるオンライン授業の実践 : オンライン授業における「場」の共有に向けて
Author(s)	筒井, 佐代
Citation	大阪大学高等教育研究. 2021, 9, p. 77-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79445
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　9（2020），77 − 87

【教育実践レポート】

大学初年次の少人数セミナー型科目におけるオンライン授業の実践

― オンライン授業における「場」の共有に向けて ―

筒井　佐代[※1]

Practice of Online Lessons in Small-Group, Seminar-Type Courses for the First Year of University: Sharing of “places” in Online Classes

TSUTSUI Sayo[※1]

本稿では，効果的なオンライン授業の方法について考察するために，2020年度に大阪大学において開講された1年次対象の少人数セミナー型科目「学問への扉：日本語のコミュニケーションを考える」の授業実践を振り返る．特にその主要な授業活動として行ったグループワークでの研究活動に焦点を当て，COVID-19の影響によって対面授業からオンライン授業に変更したことによる授業活動の変更点を確認し，受講生へのアンケート調査の結果から受講生の授業への評価を参照した上で，相互行為の「場」の共有という観点からオンライン授業の困難点や課題について考察する．

キーワード：少人数セミナー型科目，オンライン授業，相互行為，場

This paper reviews a small-group, seminar-type course, “The Door to Academia: Thinking about Communication in Japanese”, which was offered for the freshmen at Osaka University in the academic year 2020 to investigate effective ways of organizing online lessons. In particular, focusing on hands-on research activities in groups, which was the core of the course, we identified changes in lesson contents due to the transition from face-to-face to online lessons to cope with the COVID-19 pandemic. According to the questionnaire survey to the students, we can grasp the difficulties and issues of online lessons from the perspective of sharing the “places” of mutual interaction.

Keywords：Small-group, Seminar-type course, Online lesson, Interaction, Places

1. はじめに

本稿は，2020年度に大阪大学において，1年次対象の全学共通教育科目として開講された，「学問への扉：日本語のコミュニケーションを考える」の授業実践の報告である．

「学問への扉」という科目群は，2019年度に新設された少人数セミナー型初年次導入科目であり，1年次の春夏学期，すなわち入学直後に履修する必修科目である．「学問への扉」の基本方針等について，大阪大学全学教育推進機構（2018）よりまとめる．

基本方針：1年次の初めに，高校までの受動的で知識蓄積型の学びから，主体的で創造的な学びへの転換が必要であるため，課題・文献など一つの内容

所　属：[※1]大阪大学言語文化研究科
Affiliation：[※1]Graduate School of Language and Culture, Osaka University
連絡先：tsutsui@lang.osaka-u.ac.jp（筒井　佐代）

をもとにアカデミック・スキルズの指導を含む，大学における学びの基礎科目として設定されている．学生が興味ある内容を学ぶ中で，異分野の学生とも接し，異なったものの見方や課題解決の道筋を意識する場とすることで，「教養教育」の出発点をなす．また，レポートの添削指導やプレゼンテーションの指導を行うことによって学生の発信力を高める．

受講者数：最大17名（学生は第1～第8希望の科目を事前に履修希望登録し，抽選によって決定する）

配当年次・学期：1年次春～夏学期（セメスター科目）

期待される効果：①研究者との直接対話によって喚起される学びへの意識の変化．②専門とする分野以外の研究に触れることによる専門分野を見る視野の広がり．③入学直後に他学部の学生，他分野の先生と密に接する体験が育む分野の壁を越える学習意欲の向上．

2020年度は，COVID-19の影響により，対面授業ができなくなり，Zoomを使用した同時双方向型のオンラインライブ授業（以下，オンライン授業）を行うこととなった．本稿では，対面授業からオンライン授業に変更したことによる授業活動の変更点を振り返り，受講生へのアンケート調査の結果を参照した上で，対面授業と異なるオンライン授業の相互行為上の特徴について考察し，今後オンライン授業を行う上で，どのような点について考慮すべきかを，授業という「場」の共有という観点から考える．

2. 授業内容

「学問への扉」は，前節で述べた基本方針に基づき，学生の学びの形態として以下の図1のようなプロセスが基本の流れとして推奨されている．これらインプット，スループット，アウトプット，リフレクションの4種の活動を行うことで，深い学びを誘うことが可能になるとされている．

2020年度「学問への扉：日本語のコミュニケーションを考える」では，学習目標，および15回の授業内容を以下のように計画し，これら4種の活動が組み込まれるよう設定した．ただし，COVID-19の影響により，授業開始時期が予定より10日ほど遅くなったため，授業回数は1回減って14回となり，第15回目の授業を行うことができなかった．

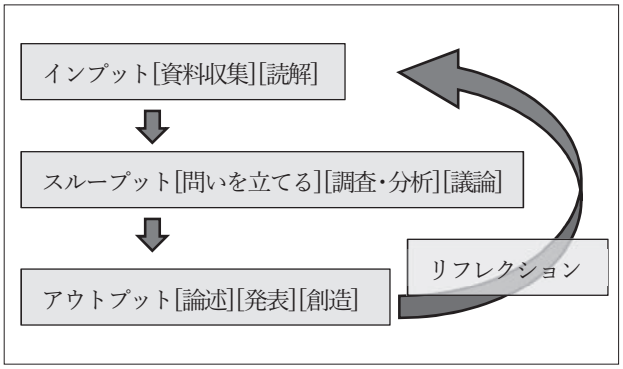

図1　授業の活動の流れ
（大阪大学全学教育推進機構 2018：図1を元に作成）

【学習目標】

1) 日本語や他の言語を客観的に観察できるようになる．
2) 会話の研究方法を学び，データ分析ができるようになる．
3) 日本語を母語としない人と日本語で会話する際の心構えができる．

【授業内容】

第1回：オリエンテーション，日本語教育・在日外国人の現状
第2回：日本語の特徴について考える
第3回：日本語と他の言語の会話の違いについて考える
第4回：会話の研究方法
第5回：グループ研究1＜勧誘会話＞（テーマ設定，ロールカード作成）
第6回：データ収集
第7回：データの分析と発表準備
第8回：グループ研究発表1
第9回：ゲストスピーカーによる発表
第10回：グループ研究2＜自由研究＞（テーマ設定，ロールカード作成）
第11回：データ収集
第12回：データの分析と発表準備
第13回：グループ研究発表2-1
第14回：グループ研究発表2-2
（第15回：異文化コミュニケーションに向けて）

上述の学習目標を達成するために，この授業では，言語研究としての会話の研究を実際に経験し，日本語のコミュニケーションの特徴を発見するというグループでの研究活動を，図1のインプット，スループット，アウトプット，リフレクションの実践として計画した．この活

動のためのグループは，グループのメンバーが全員異なる学部となるように，また男女が偏らないように，3人一組のグループを5つと2人一組のグループを1つ，教員が設定した．グループワークは第4回から開始した．

具体的な研究活動としては，まず第4回で研究方法に関する知識を与えた（インプット）．第3回の宿題として勧誘の会話に関する研究論文を読んで研究方法と感想をまとめてきてもらい，それを元に第4回で研究方法を解説し，データの種類による利点と欠点をグループで話し合って，データ収集の方法に対する理解を深めた．

その上で，1回目の研究活動を第5回～第8回，2回目の研究活動を第10回～第14回で実施した．1回目の研究活動の内訳としては，第5回で研究テーマの設定と，ロールプレイの手法を用いた会話データ収集のためのロールカード作成，第6回でデータ収集，第7回でデータの分析を行い（以上スループット），第8回でグループごとに研究結果の発表を行った（アウトプット）．1回目の研究活動に対するふり返りの活動（リフレクション）については，発表の時点で受講生各自に研究のデータと分析結果とともに感想や反省点についてレポートを書いて提出してもらった．この1回目の反省を踏まえて，2回目の研究活動を同じグループで同様の手順で第10回から第14回で行い，その後2回目の研究活動および2回を通しての感想や評価をレポートとして提出してもらった．

この授業の成績評価については，授業への参加（ディスカッション，グループワーク），課題の提出（宿題・期末レポート），およびグループ発表（発表資料と発表内容）により合否を判定する予定であったが，オンライン授業となったことにより，後述のように授業中のディスカッションやグループワークを直接見聞きすることができなくなったため，提出された課題とグループ発表により評価を行った．

3. オンライン授業における研究活動の授業デザイン

本節では，前節で述べた研究活動について，対面授業からオンライン授業となったことで変更した点について説明する．授業全体に関して対面授業と異なる点としてまず挙げておきたいことは，オンライン授業では受講生がカメラオフで参加した[(1)]ため，教員から受講生の，また受講生同士の姿が見えず声も聞こえないということである．

3. 1　グループワーク

この授業の研究活動では，研究テーマの設定や，研究に使用するロールカードの作成，データの文字化や分析作業，発表資料の作成など，グループで話し合って意見を調整し決定しなければならない様々な作業を設定していた．対面授業では，教室でグループになって話し合うという方法をとる予定であったが，オンライン授業となったため，Zoomのブレイクアウトルーム機能を使用して話し合いをしてもらうことにした．固定したグループであるため，ブレイクアウトルーム機能を使用する際は，教員が手動でグループ分けを行った．

グループワークにあたっては，まず，授業開始前にその日の授業資料を，大阪大学が提供するLMS（Learning Management System）であるCLE（Collaboration and Learning Environment）にアップロードしておき，そこにその日のグループワークの作業内容と，その結果をどのような形で提出するかを明記しておいた．それをグループワークの前に改めて説明し，話し合いの時間の長さ（回によって40分から1時間程度）を指示した上で始めてもらった．Zoomのブレイクアウトルーム機能では，教員が各グループをのぞきに行くことが可能であるが，この授業では教員はグループに入っていくことはせず，各グループでの自由に任せた．その理由は，お互いに顔も名前もわかっていない受講生同士がオンラインで話し合いをすることに抵抗を感じる恐れがあったため，話し合い自体をスムーズに進めるために，まず受講生同士が自分たちのグループのメンバーと知り合い，話し合える関係を構築することが重要だと考えたことによる．また，教員がいれば教員の発話に影響されて様々な意見が出しにくくなる可能性があるため，学術的な善し悪しの判断以前に，各自の経験から生じる自由な発想を重視して話し合いをしてほしいと考えていた．

Zoomのブレイクアウトルームで行ったことにより，他のグループの話し合いの様子が見られないということは対面の場合と大きく異なる点である．対面で行っていれば，他のグループがどのような雰囲気で話し合っているのかを伺ったり，他のグループの話を漏れ聞いたりすることもでき，そのことが多かれ少なかれ自分たちのグループに影響する可能性もある．しかし，今回は各グループが独立してグループワークを行うこととなり，グループ間の関わり合いを起こすことが難しくなった．

さらに，この研究活動では，データ収集後のデータの文字化作業，および発表資料の作成を授業外で行ってもらう必要があった．いずれも授業中にやり方等を説明

し，翌週の授業の前日にCLEで提出してもらうようにしていたが，この作業のために各グループはSNS等を使ってグループワークを行っていたようである（4.2節参照）．対面でなくなったことでうまく協働作業ができるのかどうか心配であったが，提出物を見る限りでは十分な話し合いが行われていたように見受けられた．

3．2　データ収集

今回の研究活動において，対面授業から大きく変更せざるを得なかったのは，データ収集の方法である．この授業で行う会話研究では，データ収集にロールプレイという方法を使うことを計画していた．これは，収集したい会話データの種類に応じて，会話の状況と会話者の役割（ロール）を設定し，調査協力者にそれぞれ役割を割り当ててその役割を演じて会話をしてもらい，それを録音・録画するという手法である．この手法は，対面会話で行うことが多いが，メールやSNSなどのメディアを使ったやりとりのデータを収集することも可能である．今回の授業の1回目の研究活動では，すべてのグループで「勧誘」の会話を研究するという共通のテーマを設定し，勧誘の会話の具体的な状況については各グループで決めてもらい，それに応じた会話データを収集してもらうこととした．また，2回目の研究活動では，各グループで自由に研究テーマを設定してもらい，そのテーマに即したロールカードを作成してデータ収集を行うこととした．

各グループの研究テーマ（研究発表のタイトル）は以下のとおりである．

【1回目】
・対面会話における勧誘の分析
・勧誘の工夫－日本語の勧誘において，承諾してもらうために何をするのか－
・先輩と後輩間の勧誘と断り
・LINEを使った夕食への勧誘
・LINEを用いたドタキャンの方法
・電話の勧誘[(2)]
【2回目】
・謙遜の会話
・慰めるときの対応の仕方
・褒められたときの反応－相手との関係による比較－
・褒めへの返答－日本語では褒められたときにどのような返事をするのだろうか
・不満表明とそれに対する弁明の分析
・日本語における「励まし」の研究

2回目の研究テーマがいくつかのグループで似通っているが，これは偶然であり，受講生が日常のコミュニケーションにおいて苦労したり悩んだりする状況が共通しているということによるものと思われる．

対面授業を計画した際には，各グループに授業外の時間で友人などに頼んで会話を録音させてもらうという方法でのデータ収集を考えていた．しかし，COVID-19による外出自粛の状況では友人に会うこともままならないため，授業中にZoom上で他のグループの受講生にロールプレイをしてもらってデータを収集するという方法を採ることにした．このため，2グループを合わせたグループをブレイクアウトルームで設定し，その中で相手のグループのメンバーに会話，あるいはLINE等でのやりとりをしてもらうようにした．各グループが基本的に3名であるため，相手グループのうちの2名に会話をしてもらうことになる．このセッションを2セッション行い，最低2つのデータを収集できるようにした．かかった時間は，各セッション25分程度である．1回目の研究ではLINEのデータを収集したグループが3つあったが，2回目ではすべてのグループがZoom会話のデータを収集していた．

今回のデータ収集において，データの質の面では，分析に値するデータを収集することができた．特に対面会話の状況のデータについては，Zoomで会話をするということ自体，慣れていない上にタイムラグがあったり，ネット環境の不具合があったりと，様々なやりにくさがあると思われるが，データを見た限りでは実際の対面会話と区別がつかないほどスムーズに会話が行われていた．ただし，2つの会話しか収集できなかったため，データの数としては少ない．対面授業であれば，少なくとも各自一つずつ，グループで最低3つのデータを収集してもらう予定であった．したがって，今回の授業での研究における分析データとしては，データの質には問題がなかったものの，量としては十分であったとは言えず，分析結果の説得性が弱かった．この点については，学生からも研究の反省点として指摘されていた．

3．3　研究発表

この授業のアウトプットの主要な活動であるグループ研究の研究発表については，対面授業の計画においては，紙の発表資料を作成して配付し，必要であればPowerPointなどのスライド資料も使用して発表を行い，

フロアとの質疑応答を行うということを考えていた．また発表者以外の受講生からのコメントは，各自で紙に書いてもらって各グループに渡す予定であった．しかし，オンライン授業となったため，いくつかの変更を余儀なくされた．

まず，発表資料については紙で配付できないため，事前にCLEの掲示板にアップロードしてもらうことにした．この方法の利点は，受講生が各自で授業後に他のグループの発表資料をゆっくり見て，掲示板にコメントを書き込んでもらうことができることである．そこで，発表時には，発表後に他のグループの発表へのコメントを書くように指示した．この機能により，他の受講生からのコメントや，自分以外のグループへのコメントを読むことができ，受講生間での意見の共有に役立つと考えた．

発表資料の作成については，使用するアプリケーションの指定などはせず，資料に含めてほしい内容を指示するにとどめたが，どのグループもPowerPointを使用して，わかりやすく見やすい資料を作成していた．発表時には，この資料をZoomの画面共有の機能を用いて提示し，発表を行ってもらった．スライドは時間とともに進行していくため，過去のスライドを確認したい場合は，掲示板にアップされた資料を各自ダウンロードして，確認しながら発表を聞くという方法を採ることができた．発表グループはカメラをオンにして発表を行い，メンバー間でスライドの発表分担を決め，きちんと手際よく時間内（1回目の研究発表は10分，2回目は20分）に収まるよう発表を行っていた．発表の内容については，どのグループも大変充実しており，オリジナリティのあるテーマ設定で，分析においても言語学的な観点から鋭い指摘が行われるなど，初めての研究活動としては申し分のない出来であったと言える．また，発表に対する掲示板でのコメントもポイントを的確に捉えた評価や励ましの言葉が書かれており，受講生の分析能力や表現能力に感嘆させられた．

4. 受講生へのアンケート調査

14回の授業の終了後，受講生にアンケート調査を行った．アンケートの目的は，この授業の内容や方法に対する受講生からの評価を知るためで，特に研究活動の内容・方法への評価や，研究活動におけるグループコミュニケーションの方法について知ることを目的とした．アンケートはGoogleフォームを用いて作成し，受講生にフォームのURLをメールで通知して，期日までに答えてもらうように依頼した．アンケートは全部で18問[(3)]あり，問によって多肢選択式問題が13問（うち選択肢が一つのもの12問，複数選択可能のもの1問）と回答記述式問題が5問で構成されている．アンケートは無記名とし，受講生には，回答内容は成績と一切関係がないこと，回答内容について論文等で発表する際には個人が特定できないよう最大限配慮することを伝えた．アンケートの期間は2020年8月3日から8月31日で，17名の受講生のうち，15名からの回答があった．

アンケート項目のうち，本稿では紙幅の都合上，研究活動に関連する部分について報告する．

4. 1 研究活動の量と内容に対する評価

研究活動の量と内容に関連する質問項目は，以下の図2～図5に示すように，問5の研究活動の量に関する評価，問6の授業内容に対する評価，問7のグループディスカッションに対する評価，および問8のグループ研究に対する評価である．それぞれの結果を以下に示す．

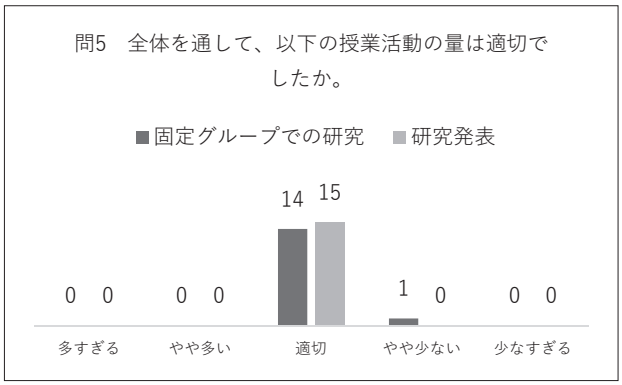

図2　アンケート結果：問5

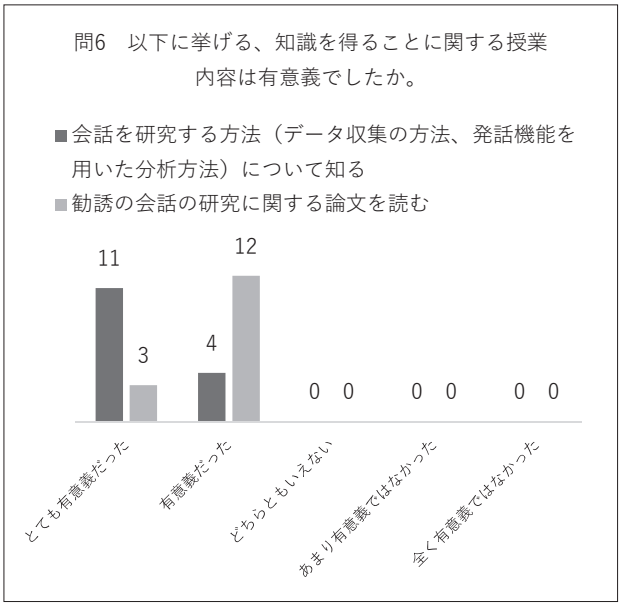

図３　アンケート結果：問６

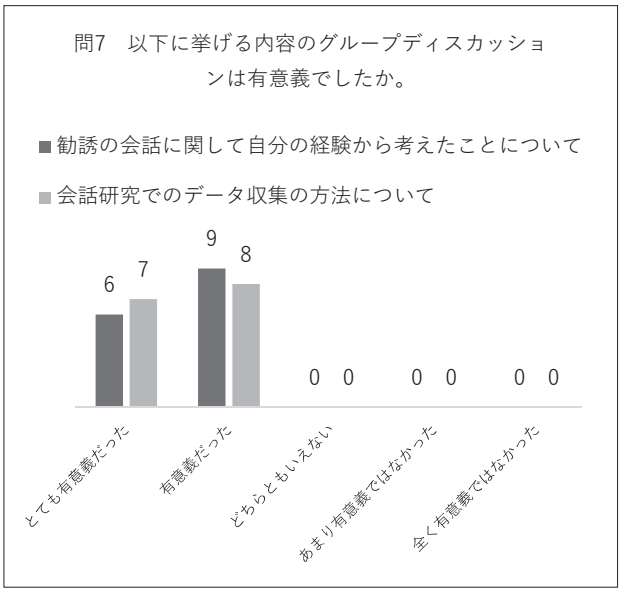

図４　アンケート結果：問７

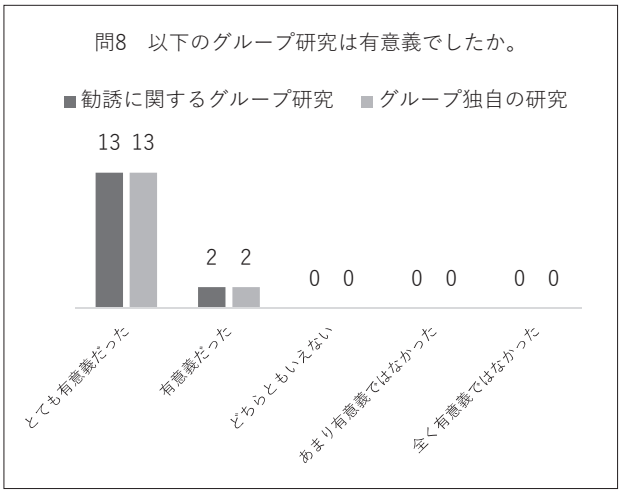

図５　アンケート結果：問８

これらの結果を見ると，この授業における研究活動に対して，受講生はおおむね肯定的に評価していることがわかる．問5で研究活動が「やや少ない」と答えた人が1名いるが，スケジュール上，分析作業や発表準備の時間が十分でなかった可能性があると考えられる．問6の知識のインプットに関して，論文を読むという作業については「有意義だった」と回答した人が12名と，「とても有意義だった」の3名より圧倒的に多いが，これは研究論文を読むのが初めてだったために，論文の文体や専門用語に不慣れであったことによるものであろう．問7は，研究活動の準備段階でのディスカッションについてであり，ディスカッションの内容が実際の研究とどう結びつくのか，理解できていなかった可能性があり，そのことが「有意義だった」の方が多いという結果に表れているのではないかと思われる．問8では，2回の研究に対して13名が「とても有意義だった」と回答しており，実際の研究についてはかなり満足度が高かったようである．

4．2　研究活動におけるグループワークへの評価

グループワークに関する質問項目としては，以下の図6～図8に示すように，問10のグループワークへの自身の参加態度，問11のグループのコミュニケーションへの評価，問12のグループでの連絡に使用したメディアを聞く項目に加えて，後述する問13のグループワークでの困難点についての項目が挙げられる．

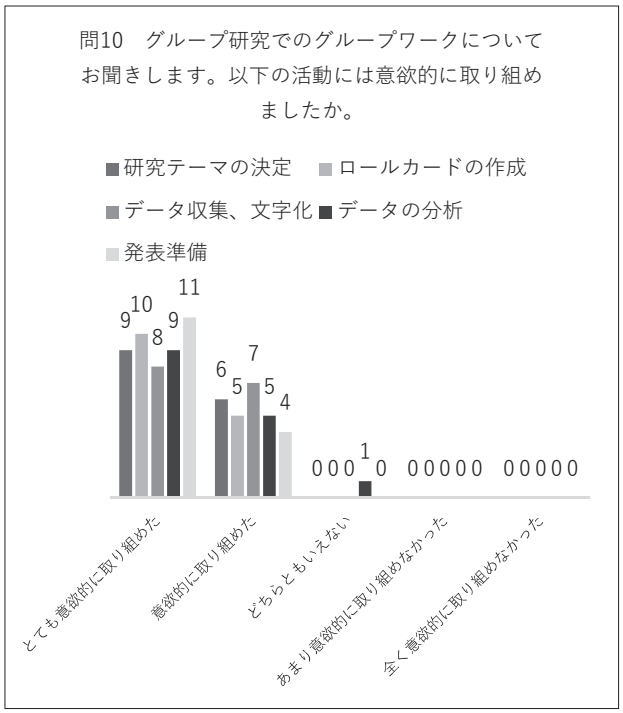

図６　アンケート結果：問 10

まず，問10では，どの活動も「とても意欲的に取り組めた」が最も多く，全体的に意欲を持って活動を行っていたことがわかる．ただし，データの分析については「どちらともいえない」が1名おり，これは会話データの緻密な分析作業に困難を感じていたことによるのではないかと思われる．

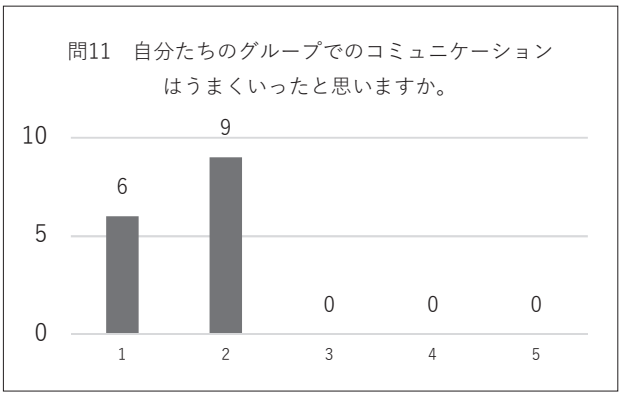

図７　アンケート結果：問 11（1「とてもうまくいった」から 5「全然うまくいかなかった」の５段階による回答）

問11から，受講生の意識としては，グループ内のコミュニケーションはおおむねうまくいったと捉えていることがわかる．グループワークでの困難だった点について，問13「グループワークで難しかったことがあれば，自由に書いてください.」で聞いたところ，「自分のグループには留学生の方がいらっしゃり，意見交換の際などたまに思ったように言葉が伝わらなかったりやその逆もあったりしましたが，（こうしたことはまさしく授業のテーマに関わることでもありますし，）いい経験になったと思います.」という留学生とのコミュニケーションに関する回答や，「Zoomだと，対面会話のデータ収集は，やはり実際と少し雰囲気が違うものになると感じました.」というデータ収集の方法に関する回答，「パワポ作成，zoomで話し合い（会話データに）発話機能をつけること」という発表準備や分析作業に関する回答があった．しかし，グループ内のコミュニケーションに対する問題点は思ったほど指摘されなかった．

授業での研究発表を見る限り，どのグループも充実した内容の発表を手際よく行っていたため，授業外でかなりの話し合いを行ったのではないかと推測された．そこで，授業外での話し合いの際にどのようなメディアを用いたのか聞いたのが，次の問12である．

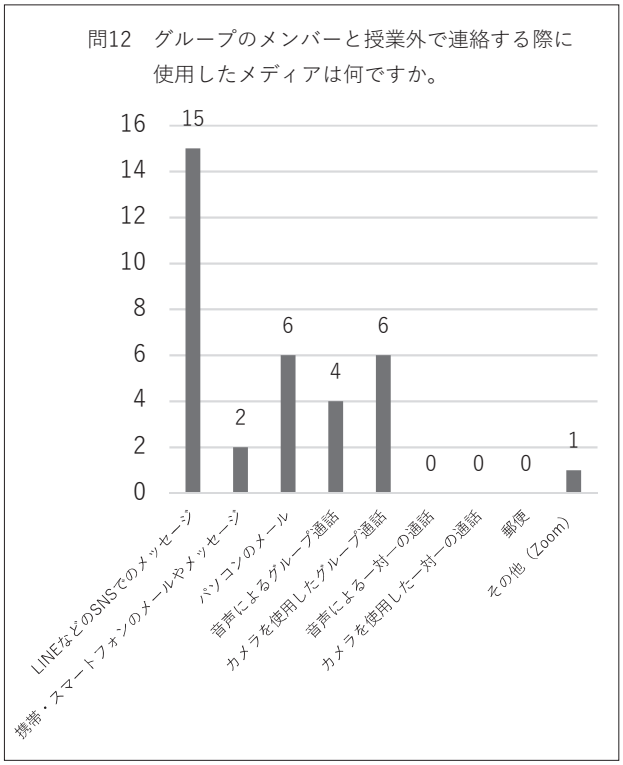

図８　アンケート結果：問 12（複数選択可能）

この結果から，すべての受講生がグループ内でのコミュニケーションにおいてLINEなどのSNSでのメッセージを主に使用していたことがわかる．それに加えて，音声あるいはカメラを使用したグループ通話（その他のZoomもこれに含めてよいだろう）を行っており，文字のメッセージによるコミュニケーションだけでなく，LINEやZoom等のアプリケーションを駆使して音声や映像によるコミュニケーションを取っていた点が興味深い．一方，一対一のコミュニケーションを行っていた受講生はおらず，グループワークをグループのコミュニケーションとして行っていたことが，まとまりのある研究発表につながったのではないかと考えられる．ただし，SNSやメール等のメッセージを一対一で行っていたのか，グループで行っていたのかを問に含めていなかったため，その点について明らかにできなかったことは，このアンケートの反省点である．また，何を話し合うときにどのメディアを使用したのか，どのメディアが何に有効なのかなど，受講生のメディアの使い分け方についても調査すれば，グループワークのコミュニケーションの実態をより詳細に明らかにすることができただろう．

4．3　オンラインでの研究活動への評価

対面授業ができず，ZoomやCLEを使った研究活動を

行ったことについて，受講生がどのように評価しているのかを確認するため，以下の問14を設定した．

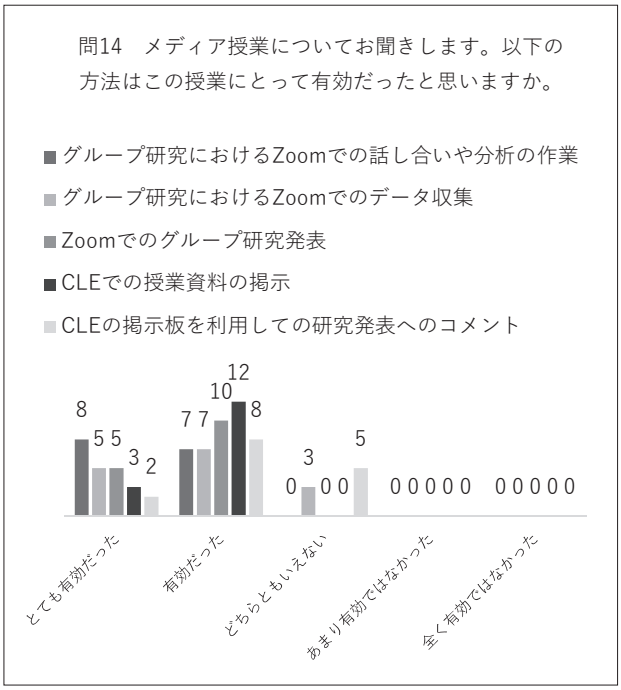

図９　アンケート結果：問 14

この結果から，研究活動における様々な方法については，これらの方法を取るより仕方がないという事情もあってか，おおむね有効だったと捉えていることがわかる．ただし，データ収集においては3名，研究発表へのコメントにおいては5名が「どちらともいえない」と回答している．4.2節で述べた問13でもデータ収集についての指摘がなされていたことから，対面でのデータを収集して分析した方が信頼性のある分析ができたのではないかと考えていると推察される．また，研究発表へのコメントについては，授業時間内に全員がコメントをする時間を取ることができないため，授業時間外でゆっくりコメントを書いてもらった方が良いのではないかと考えていたが，コメントを他の受講生に読まれることに対する抵抗感があったかもしれず，コメント方法については再考の余地があると言えるだろう．

5. オンライン授業という場の共有に向けた考察

以上で見てきたアンケート結果では，受講生はこの授業の研究活動に対して，おおむね肯定的に評価していることがわかった．また，アンケートの問16で学習目標についての達成度をどのように捉えているか聞いたところ，2節で挙げた学習目標の1と2については15名が，3については11名が「十分達成できた」「達成できた」と答えていた．このことだけでこの授業が成功であったとは言えないが，一定の評価を得ることができたとは言えるかもしれない．本節では，今回の授業の方法を踏まえつつ，今後よりよいオンライン授業を行っていくために，授業を相互行為として捉え，相互行為としてのオンライン授業の問題点や課題を考察したい．

一般に，対面のコミュニケーションは，言語だけでなくジェスチャーや視線など非言語行動も含めたマルチモーダルな相互行為として捉えられる．高梨（2016）は，近年の相互行為の研究においては，言語的な発話と非言語行動は時間的に共起するものであり，補完し合うことによって統合的な役割を果たすものとして扱われていると述べている．

翻ってオンライン授業がどのような相互行為であるか考えてみたい．まず，教員の側から考えると，受講生の情報が限定されているという特徴が挙げられる．対面授業であれば，17人の受講生の顔を常に見ることができるため，受講生が興味を持って聞いているのかどうかある程度判断できる上に，時々質問を投げかけて答えてもらうことで理解や意見を確認することもできる．しかし，今回の授業では受講生がカメラとマイクをオフにして参加していたため，教員は受講生を見ることも受講生の声を聞くこともできず，したがって教員の話を受講生がどのように聞いているのか，どの程度理解し興味を持っているのかがわからなかった．そのため，授業中にチャット機能でその日の課題に関する意見や感想を書いてもらったり，毎週の提出物で授業の感想を書いてもらうなどして，授業に対する理解度や興味を確認していた．しかし，そのような感想は一度反芻してまとめたものであるため，いわば遅れた反応であり，一瞬一瞬のリアルタイムな反応とは異なるものである．したがって，それらの感想を参考にしてその後の授業の内容や方法を改善することはできたものの，授業中のこちらの話に対する反応がわからないという状況については，早い時点で諦めざるを得なかった．このように一方向の相互行為として授業を行うことにした結果，受講生がどのように聞いているか，どの程度の説明なら理解されるか，どのくらい長く話すと飽きてくるかなどをどのように見積もるかが，授業を進行する上での教員にとっての課題となり，その見積もりが間違っている可能性も考慮しながら授業を行うことは，かなりの労力を費やす作業であった．

また，受講生の観点から考えると，受講生同士はお互

いの姿が見えず声も聞こえないという状況にあり，実質的な相互行為を行うことができない．そのため，最初の授業で全員に自己紹介をしてもらったり，2回目からはZoomのブレイクアウトルーム機能を使ってランダムなグループでディスカッションを行ってもらったりすることで，受講生間の交流の機会を作るよう心がけた．ディスカッションの際にはカメラをオンにしてもらったため，受講生は顔見知りになっていくことができ，さらに研究活動では固定したメンバーとの長期にわたる活動で，グループメンバー同士はある程度親しい関係を構築できていたと思われる．3.1節でも述べたように，グループで話し合っている時間帯には他のグループの様子を伺うことはできないため，対面の教室で生じるような複数グループの声が響く中で話し合うという状況と比べると，他のグループからの影響を受けることなく自分たちのグループでの閉ざされた話し合いとなっていたが，その分，グループ内での協力の意識が強まった可能性も考えられる．

このような様々に制約のあるオンライン授業において，知識を伝達することは，説明を詳細に行い，資料を提示し，学生の感想に合わせてさらに内容を追加するなどすれば可能ではある．実際，今回の授業では，知識の伝達については特に大きな問題はなく，教員の意図したとおりに研究活動が進められていた．しかし，授業が知識を得るためだけのものではないことは，この「学問への扉」という科目群の方針の前提である．すなわち「異分野の学生とも接し，異なったものの見方や課題解決の道筋を意識する場とする」という基本方針にあるように，異なる他者との「場」において相互に関わり合いながら学ぶことが重要だということである．

このような「場」をオンラインで構築することは，おそらく容易なことではない．対面授業と異なり，全員が別々の空間にいるオンライン授業では，カメラをオンにした状態であっても，お互いに見える姿はせいぜい上半身だけであるため，同じ空間にいないことは明らかであり，したがって同じ「場」を共有していると捉えることは簡単ではない．原田（1997）はテレビ電話の違和感に関する調査において，テレビ電話のぎこちなさは，視覚情報があるがゆえに対面対話事態として受け止めながらも，視覚情報に多くの欠損があるため対面対話とは異なるものとしても受け止めており，その結果相手との対話の場をどこに設定すればよいのかが決定できず，場を共有することができないからであると述べている．遠隔での相互行為における視覚情報の欠損については，近年の相互行為分析においてしばしば扱われるテーマであり，視野の限度が相互行為に与える影響については，Webビデオ会議を分析した池田（2017）や遠隔の家族会話を分析した砂川（2017）に詳しい．対面とは異なる環境において参与者が円滑な相互行為を行うためには，「画面注視」という行為によって相互行為への関与性を指標したり（池田2017），一方の空間にしかないものを限られた視野のなかで共有するために協働的解決を行う（砂川2017）など，参与者が積極的に関与しなければ，円滑なコミュニケーションは成立しないのである．

一方，視覚情報のない電話での対話が成功する要因について，佐藤（2012）では，ことばが媒介する社会的あるいは対人的な想像力によって電話空間を成立させていることによると指摘している．佐藤は，物理的に同じ空間にいない相手とことばという道具を使って話し，ことばの音による身体の共鳴に加えて，ことばの意味によって「身体的で社会的で空間的なリアリティ」（佐藤2012：121）をそなえた世界を立ちあげ，そこにいない相手に対する想像力を働かせることによって，見えない空間を共有しているのだという．

これらのことを敷衍して考えれば，オンライン授業で授業という場を成立させ共有するためには，単にカメラをオンにして相手の姿を限られた視野の中で見るだけでは不十分であり，ことばを用いたやりとりで「身体的で社会的で空間的なリアリティ」をそなえた世界を立ちあげ，そこにいない相手に対する想像力を働かせることが重要だということになる．今回の授業では，授業中にZoomのチャット機能を使って受講生に意見を書いてもらってそれを元に授業を進めること，様々な受講生と話す機会が持てるように，Zoomのブレイクアウトルーム機能を使ってランダムなグループでのディスカッションの時間を作ること，受講生からの課題や感想を全員で共有できるようにまとめて次回の授業で提示すること，研究発表に対するコメントを掲示板に書いてもらって全員で共有すること，受講生から授業のやり方に関する要望を出してもらって授業に反映させることなど，お互いの相互行為を様々な側面から促進できるようなマルチモーダルな方法を模索した．このそれぞれの相互行為の機会に対して教員と受講生が積極的に関与し，お互いのことばを理解し，それに対して反応を返し，その相互行為をオンラインで行う上での不具合も含めた状況に配慮しつつ，円滑な相互行為を行うことに志向することによって，初めて授業という場を共有することが可能になるのではないかと思われる．特に，実際に会ったこともな

い教員と受講生同士が，最初からお互いに率直に意見を交わすということは難しく，ことばを用いたやりとりの積み重ねによって信頼を徐々に構築していくことで，授業という場を作り上げ共有するという過程が不可欠だろう．

このような授業形態に慣れていないであろう受講生にとって，この授業に参加するための努力は並々ならぬものがあったはずである．この授業が有意義なものとなったとすれば，それはひとえに受講生が学習意欲を持ち続け，相互行為に積極的に関与し，この授業を有意義なものとしようとするひたむきな努力によるものであったと言える．アンケートの問1によると，この授業は受講生全員が履修希望登録時に第一希望として登録したということであり，だからこそ最後まで積極的に授業に参加してくれたのかもしれないが，それは裏を返せば第一希望でない場合には受講生が積極的に参加できないかもしれず，オンライン授業の場の構築や共有が思うようにいかない可能性があるということである．したがって，教員は受講生の意欲や興味の度合いも考慮して，どのような相互行為が必要であるかを授業ごとに考えて様々な方策を工夫し，授業の場を共有するための試行錯誤を繰り返さなければならないだろう．

オンライン授業は今後も様々な教育機関において一つの主要な授業形態となっていくであろうが，それに伴ってどのような授業方法が効果的であるのか，相互行為としての授業の観点から実践と試行錯誤を繰り返し，よりよい授業の場の構築と共有について考え続ける必要がある．このような課題について考えるきっかけを与えてくれた受講生に，心から感謝したい．

受付2020.10.5／受理2021.1.12

註

(1) 第2回目の授業で，カメラオンとオフのどちらがよいかを聞いたところ，「カメラオンだと恥ずかしい」「緊張する」「人の顔が画面に出ていると気になってしまう」などの意見があったため，カメラオフで参加してもらうことにした．ただし，カメラオンでもかまわないという受講生も数名いた．

(2) これは，電話をしようという誘いをLINEで行うという状況のやりとりの研究である．

(3) 質問項目は以下のとおり．

「2020年度学問への扉：日本語のコミュニケーションを考える」授業アンケート

1. この授業は，履修希望登録時の第何希望でしたか．
2. この授業を取る前に，言語やコミュニケーションに興味を持っていましたか．
3. 授業開始前に，この授業に対してどのようなことを期待していましたか．
4. 授業開始前に，この授業に対してどのような不安や心配がありましたか．
5. 全体を通して，以下の授業活動の量は適切でしたか．［担当教員の講義］［ランダムなグループでのディスカッション］［ランダムなグループでのディスカッション］［研究発表］［秦秀美先生とマリアさんの発表］［提出課題］
6. 授業内容についてお聞きします．以下に挙げる，知識を得ることに関する授業内容は有意義でしたか．［日本語教育の現状，日本における外国人の現状，「やさしい日本語」について知る］［日本語の特徴を知る］［会話を研究する方法（データ収集の方法，発話機能を用いた分析方法）について知る］［日本語と他の言語の対照に関する文献を読む］［勧誘の会話の研究に関する論文を読む］［秦秀美先生とマリアさんの発表を聞く］
7. 以下に挙げる内容のグループディスカッションは有意義でしたか．［日本語と他の言語の対照に関する文献について］［会話の違和感について］［勧誘の会話に関して自分の経験から考えたことについて］［会話研究でのデータ収集の方法について］
8. 以下のグループ研究は有意義でしたか．［勧誘に関するグループ研究］［グループ独自の研究］
9. 秦秀美先生とマリアさんによる以下の活動は有意義でしたか．［グループディスカッションへの参加］［講義内容に関するコメント］［グループ研究発表へのコメント］
10. グループ研究でのグループワークについてお聞きします．以下の活動には意欲的に取り組めましたか．［研究テーマの決定］［ロールカードの作成］［データ収集，文字化］［データの分析］［発表準備］［発表］
11. 自分たちのグループでのコミュニケーションはうまくいったと思いますか．
12. グループのメンバーと授業外で連絡する際に使用したメディアは何ですか．
13. グループワークで難しかったことがあれば，自由に書いてください．
14. メディア授業についてお聞きします．以下の方法はこの授業にとって有効だったと思いますか．［Zoomでのオンライン授業］［Zoomのチャット機能を使った意見の発表］［Zoomのブレイクアウトルーム機能を使ったランダムなグループでのディスカッション］［グループ研究におけるZoomでの話し合いや分析等の作業］［グループ研究におけるZoomでのデータ収集］［Zoomでのグループ研究発表］［CLEでの授業資料の掲示］［CLEでの課題提出］［CLEの掲示板を利用しての研究発表へのコメント］

15. 上記の方法だったからこそよかったということがあれば，理由も含めて説明してください.
16. この授業の学習目標はどのくらい達成できましたか.［日本語や他の言語を客観的に観察できるようになる］［会話の研究方法を学び，データ分析ができるようになる］［日本語を母語としない人と日本語で会話する際の心構えができる］
17.「学問への扉」の科目では，以下のような効果が期待されています．この授業は，以下の点について効果があったと思いますか.［研究者との直接対話によって喚起される学びへの意識の変化］［専門とする分野以外の研究に触れることによる専門分野を見る視野の広がり］［入学直後に他学部の学生，他分野の先生と密に接する体験が育む分野の壁を越える学習意欲の向上］
18. この授業の内容や方法について，改善できる点があれば自由に書いてください.

参考文献

池田佳子（2017）「Webビデオ会議－関与性を指標する相互行為リソースの一考察－」『コミュニケーションを枠づける－参与・関与の不均衡と多様性』片岡邦好・池田佳子・秦かおり編 くろしお出版 pp.69-88

大阪大学全学教育推進機構（2018）『全学共通教育科目「学問への扉」担当者便覧』

佐藤健二（2012）『ケータイ化する日本語－モバイル時代の“感じる”“伝える”“考える”』大修館書店

砂川千穂（2017）「空間をまたいだ家族のコミュニケーション－スカイプ・ビデオ会話を事例に－」『コミュニケーションを枠づける－参与・関与の不均衡と多様性』片岡邦好・池田佳子・秦かおり編 くろしお出版 pp.91-108

高梨克也（2016）『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版

ドルニェイ，ゾルタン（2006）『外国語教育学のための質問紙調査入門』八島智子・竹内理監訳 松柏社

原田悦子（1997）『人の視点からみた人工物研究』共立出版株式会社